

同窓会

の

チカラ

同窓会のための情報誌

2026

紹介●同窓会活動紹介

- ・グラウンド芝生化奮闘記：福井県立若狭東高等学校同窓会
- ・生徒たちが主役、同窓会が支える地域の居場所づくり：仙台白百合学園同窓会
- ・同窓会主催の企業説明会：高知県立高知工業高等学校同窓会
- ・卒展×同窓のつどい：東京工芸大学同窓会

リレー連載●私と同窓会

- ・島根大学法文学部同窓会
同窓会会長 吉山 治

わが学び舎

- ・一般社団法人岐阜工業高等学校同窓会



Our Proud

岐阜県立岐阜工業高等学校（岐工記念館）
1929年（昭和4年）竣工 木造2階建／国登録有形文化財

Vol. 18



グラウンド芝生化奮闘記

福井県立若狭東高等学校同窓会

人が集うオアシスへの変貌



●連絡先

〒917-0293 福井県小浜市金屋48-2
TEL 0770-56-0400 FAX 0770-56-3763
メールアドレス dousou@wakasahigashi-h.ed.jp
https://www.wakasahigashi-h.ed.jp/dousouka

同窓会事務局 朽木 雅文（くつき・まさふみ）氏
教諭・ラグビー部監督 平成3年3月 電子機械科卒業

●福井県立若狭東高等学校は、全国高等学校ラグビーフットボール大会（通称、花園）にこれまで36回出場している常連校である。同校の卒業生であり、現在、ラグビー部の監督を務める朽木 雅文氏は、長年の夢であったグラウンドの芝生化を実現した。学校、同窓会、ラグビー部後援会、地域住民を巻き込んだ一大プロジェクトについて、同氏にその実態を伺った。

夢への第一歩

本校は1学年約120人、全校生徒約350人の小規模校です。野球部やサッカー部がないため、グラウンドにはラグビーボールが常設され、日々ラグビー部が練習に励んでいます。私自身も本校の卒業生で、在学中はラグビー部員として土のグラウンドで練習に打ち込んでいました。現在は教員として母校に戻り、ラグビー部の監督を務めています。県内外の学校と交流する中で、芝生のグラウンドを備えた公立高校の存在を知り、いつか本校のグラウンドも芝生化したいという思いを抱くようになりました。しかし、芝生化には多額の費用と人手が必要で、すぐに実現できるものではありません。そこでまずはPTAやラグビー部後援会、同窓会の皆さまにご協力をお願いし、グラウンドに大量の砂を入れることから始めました。選手のけがのリスクを少しでも軽減するためです。最初は10トンダンブ10台分を搬入し、その後も毎年3台分ずつ追加してきました。

転機が訪れたのは、2年前に前校長が赴任されたことでした。行動力にあふれ、学校をより魅力的に改革したいという強い思いを持つ方です。私はこの機会を逃すまいと、グラ

ウンド芝生化の構想を相談しました。校長は快く賛同し、関係各所への働きかけを進めてくださいました。同時に同窓会長も県などへ積極的に働きかけてくださり、その結果、日本サッカー協会が主催する社会貢献活動「JFAグリーンプロジェクト」ポット苗方式芝生化モデル事業に、県内初の公立高校として採択されました。長年の夢が、現実へと大きく動き出した瞬間でした。

同窓会、地域住民の協力

JFAから提供されたポット苗をグラウンド一面に植えるには、多くの人手が必要でした。既に芝生化を実現した県外の学校では、苗植えに1〜2日かかったと聞いていたため、どのように協力を募るかを話し合いました。そして、地域に開かれたイベントを企画し、その一環として苗植えを行うことにしました。生徒会が中心となって企画を考え、チラシを配布したり公民館に置かせていただいたりしました。その結果、当日はなんと450人もの方々が参加してくださいました。苗植えは約1時間で終わり、その後はキックンカーや吹奏楽部の演奏などを楽しんでいただきました。地域の力の大きさを実感した一日でした。



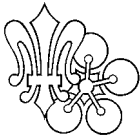
最も苦労したのは事前準備です。50センチ間隔でグリッドを引き、約3万8千株の苗を植える穴を開ける作業を、ラグビー部員を中

心に約1週間かけて行いました。その努力があったからこそ、当日の作業を短時間で終えることができました。芝生化後も維持管理は欠かせません。雨の日以外は毎日90分から2時間の水やりを行っています。部員が遠征などで不在の際には、教職員やラグビー部の保護者、近隣の同窓生が協力してくださいます。一方で、部員たちの笑顔や、あの日450人もの人々で埋め尽くされたグラウンドの光景は何よりの喜びです。今では幼稚園児や小学生の遠足、休日の家族連れの憩いの場としても利用され、地域のオアシスとなっています。



変貌する教育環境

芝生化により教育環境も大きく変わりました。芝生化初年度は、体育館での体育祭のほかに、別の日に芝生グラウンドの上でも体育祭が行われました。休み時間に芝生でくつろぐ生徒の姿も見られます。ラグビー部も、他県へ遠征する立場から、県外の強豪校を迎える立場へと変わりました。芝生化という夢は、校長の掲げる魅力ある学校づくりと重なり、同窓会や地域の皆さまの支えによって実現しました。これからは芝生を大切に守り育てながら、人が集い、笑顔が広がる場所であり続けられるよう努めていきます。



生徒たちが主役、同窓会が支える 地域の居場所づくり



●連絡先
〒981-3205 仙台市泉区紫山一丁目2-1
TEL 022-777-5777 FAX 022-777-3555
右から
同窓会会長 佐藤 則子(さとう・のりこ)氏
仙台白百合学園 昭和57年(高校34回)卒業
宗教部・小百合会顧問 仙台白百合学園教諭
渡辺頭一郎(わたなべ・けんいちろう)氏

仙台白百合学園同窓会

創立130年の奉仕の伝統から
生まれた新たな取り組み

●仙台白百合学園には、創立当初から続く「小百合会」というボランティア部がある。130年もの歴史を持つこの部活動は、長年にわたり様々な奉仕活動を展開してきた。この伝統ある活動に2024年4月、新たな一歩が加わった。それは一体どのような内容なのか？具体的な活動内容などを同窓会長の佐藤則子氏と教諭で小百合会顧問を務める渡辺頭一郎氏に伺った。

顧問を務める渡辺教諭は当時を振り返りこう語ってくれた。「現在、小百合会には50名あまりの生徒たちが在籍しており、それぞれが参加可能なボランティアを選択し奉仕活動に従事しています。これまでは私が、地元教会や自治体、NPO法人などと協議をし、日時や活動内容を調整していましたが、ある時、生徒たち自らが、主体的にできるボランティア活動は何かを話し合い、出した答えが「こども食堂」の開催でした。生徒たちから主体的にやりたいという声が上がったのは、生徒たちはもちろんのこと、小百合会にとっても大きな転機となりました」

活動の原点にあるのは、コロナ禍を通じて見えてきた地域の課題だ。貧困家庭、技能実習生、高齢者の単身世帯、ひとり親家庭など、様々な事情で孤立している人々の憩いの場を作りたい——そんな思いから、2年目となる今年度は対象を広げ「みんな食堂」として活動を発展させているそうだ。

高校・大学・同窓会が 一体となったチーム運営

「みんな食堂」の特徴は、高校生が主体的に運営する点にある。チラシ作り、レクリエーションの企画、当日の会場運営まで、生徒たちが中心となって進めている。メニューの考案と調理を担当するのは、系列の仙台白百合女子大学健康栄養学科の学生たちだ。将来、管理栄養士を目指す彼女たちが、専門知識を活かして安全で美味しい食事を提供している。

「また来るね」の言葉が 生徒たちの力に

設立当初は1組、2組と厳しい船出だったが、試行錯誤の上、リピーターも増え、参加者が友人を誘い合う形で輪が広がっている。ある80代の女性は、一人で食事をしている知人を気にかけて誘い、その輪はさらに広がっているという。食事だけでなく、トランプやボードゲームなど世代を超えて楽しめる遊びも用意。60〜70代の高齢者から小さな子ども連れの家族まで、幅広い世代が交流する憩いの場となっている。生徒たちの喜びは、参加者からの「おいしかった」「楽しかった」「また来るね」という言葉だ。



「お金を出すだけじゃない」 組織として関わる、それが同窓会の力

「個人ではなく、組織として関わる。それが同窓会の力なんです」
仙台白百合学園同窓会の佐藤会長は、そう語る。経済的支援だけでなく、会員自らが現場に入り、後輩たちの活動を支える。それが、この同窓会が選んだスタイルだ。組織として関わることで、責任ある支援ができる。趣味や趣向ではなく、役割として関わる——それが、持続可能な支援につながっている。

いっぽう、現役生徒にとっては、この活動を通じて、「将来自分も同窓会の一員として、後輩を支える側になれる」という実感が生まれている。

「自分たちも同窓生だから」という共通点から、自然と話が弾む。
「どっちの大学に行こうか迷っているんだけど」と、高校3年生が同窓会員に相談する。それは、単なる食事提供の場を超えた、世代間の助け合いの場となっている。

「これが同窓会の力だね」
そんな言葉が交わされる。世代を超えて、母校という共通項でつながる。それは、同窓会という組織だからこそ生まれる、特別なつながりだ。

同窓会活動の持続可能性

「みんな食堂」の活動は、同窓会の未来への投資でもある。130年続く小百合会のボランティア精神が、新しい形で受け継がれ、そして次の世代へとつながっていく。

「生徒が主役の活動を支える立場を維持しつつ、必要に応じて協力の輪を広げていきたい」
同窓会の温かい支援のもと、仙台白百合学園の伝統は、今日も新しい形で紡がれている。■





同窓会主催の企業説明会

高知県立高知工業高等学校同窓会



●連絡先

〒781-8010 高知市棧橋通2丁目11-6

TEL・FAX 088-831-4133

<https://www.kthsdousoukai.net>

事務局長 中野 邦彦 (なかの・くにひこ) 氏

地元企業で働く魅力を知ってほしい

●高知県立高知工業高等学校は、明治45年の創立以来、「工業富国基（工業は富国の基なり）」の理念を掲げ、3万人を超える有為な人材を全国の産業界へ送り出してきた。県内随一の歴史と伝統を誇る工業高校である。就職指導は来校企業からの求人をもとに学校が主体となっており、近年は同窓会もその支援に参画しているという。

その背景と具体的な取り組みについて、元教諭であり同窓会事務局長を務める中野邦彦氏に話を伺った。

同窓会長の熱い思いがきっかけで

現在、本校では毎年およそ270名の生徒が卒業し、そのうち約半数が就職を選択しています。求職者約140名に対し、2,000社を超える企業から求人をいただいております。生徒たちは担任や進路指導の教員と相談しながら、多くの選択肢の中から進路を決めています。就職者の約6割は県内、約4割は県外へ進みます。一方、進学した生徒の約7割は卒業後に県外企業へ就職していますので、結果として卒業生全体の半数以上が県外で働いている状況です。

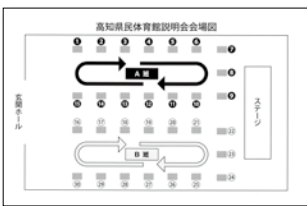
こうした現実には強い危機感を抱いたのが、当時の同窓会長・右城猛氏（第12代会長）でした。人口流出や少子高齢化が進むなか、「県内にも魅力ある企業が数多くある。その存在を生徒たちにはしっかり伝えることができれば、地元就職やUターン就職の増加につながり、ひいては地方創生に寄与できるのではないか」とその思いを受け、私たち同窓会役員も真剣に議論を重ね、令和7年3月、初の同窓会主催による企業説明会を開催しました。

初開催の企業説明会

初回は20社限定とし、会場は学校近隣の県民体育館を使用しました。同窓会報への協賛広告掲載企業であること、そして別途出展料も負担いただくことを参加条件に募集しましたが、早々に定員へ達するなど、企業の皆さまからも積極的な協力をいただきました。生徒も約250名が参加を希望し、大変意欲的な姿勢が見られました。当日は企業ブースの配置を抽選で決め、生徒をグループに分けて順番に各社を回る方式を採用しました。特定の企業に人気が集まらないよう配慮し、すべての企業の説明を聞ける仕組みにしました。一巡後は自由行動とし、さらに詳しく質問を重ねる生徒の姿も見られました。結果として、生徒・企業双方から好評を博しました。経費は会場費や昼食、参加記念品などに充て、企業からの出展料と同窓会予算で対応しました。また、事前に報道各社へプレスリリースを配信したことで、当日は地元テレビ局の取材も入り、この取り組みを広く発信することができました。

さらなる拡大開催

翌年は実行委員会を立ち上げ、9名体制で準備を進めました。参加企業を30社へ拡大し、会場レイアウトや運営方法も改善しました。さらに、配布パンフレットには企業名だけでなく事業概要も掲載し、生徒が



より理解を深められるよう工夫しました。その結果、第2回も大変好評をいただくことができました。



第2回 企業説明会の様子

やりがいと継続

今回の取り組みで何よりの喜びは、第1回に参加した生徒の中から出展企業へ就職した生徒が現れたことです。自分の目で見て、直接話を聞き、地元企業の魅力を感じたうえで進路を選んできました。企業からも「単なる短期的な求人活動にとどまらず、自社を広く知ってもらえる貴重な機会」として、継続的な参加意欲を示していただいています。

今後も同窓会主催の企業説明会を着実に発展させ、生徒の就職支援を通じて母校の発展に貢献するとともに、同窓会の力で地域の活性化にもつなげていきたいと考えています。



●同窓会事務局連絡先
島根大学法文学部同窓会事務局
〒690-8504
島根県松江市西川津町1060
E-mail: jimukyoku@doso-shimane-u.jp

私と同窓会

島根大学法文学部同窓会 会長 吉山 治

母校と同窓会は運命共同体



島根大学法文学部同窓会・会長
吉山 治（よしやま・おさむ 67歳）
文理29期・昭和56年3月卒業

1959年1月24日生、島根県隠岐の島町出身、1981年島根大学文理学部卒業、同年島根県職員に採用、以後旧自治省勤務、松江市副市長、島根県東京事務所長、雲南市副市長を経て2024年12月現役引退。現在島根大学法文学部同窓会会長、島根県明るい選挙推進協議会会長

○はじめに

現役生活約44年を終え、気持ちも新たに第二の人生を歩み始めた。67歳となった今、この第二の人生はまさにラストステージである。残された時間の早さを思えば、悔いのないよう目標を定め、絞り込みながら一日一日を大切に過ごしたいと考えるようになった。新しいことに次々と挑戦するよりも、これまでの人生で育まれてきたご縁をあらためて見つめ直し、それを花開かせ、次代へと継承・発展させていきたい。その中心にあるのが、私にとっては島根大学法文学部同窓会である。

思いを込めて表題を「母校と同窓会は運命共同体」とした。日本社会が少子高齢化と人口減少の時代に入り、国際情勢も不安定さを増す中で、あらゆる分野において持続可能性が問われている。国立大学法人を取り巻く経営環境は今後さらに厳しさを増すことが容易に予想される。任意団体である我が同窓会も課題山積であるが、母校の行く末を思う時、母校の最大の応援団である同窓会が自ら変革に取り組み、強みと存在意義を最大限に発揮して今こそ母校に貢献せねばと強く感じている。

○島根大学法文学部同窓会との出会い

私と法文学部同窓会との関わりは、1999年4月、母校開学50周年法文学部同窓会実行委員会において事務局会計を引き受けたことに始まる。当時40歳であった。それから27年が過ぎ、事務局長を経て会長に就任して9年になる。振り返れば、私の人生の中で仕事以外で最も多くの時間を費やしたのは同窓会活動であったように思う。家族には多くの負担をかけたが、この四半世紀の法文学部同窓会の歩み、そして同窓会を通じて母校

の変遷を身近に見てきたというのも私の人生の中で島根大学に何か深いご縁を感じるところである。

○同窓会の改革

関わり始めた当時、同窓会は深刻な財政危機に直面していた。唯一の収入であった新入生からの同窓会入会費は年々減少し、このままでは活動継続は困難な状況であった。そこで考えたのが同窓生の投稿文を主としてその他同窓会活動を紹介した年報を発行し、その送付と併せて年会費（3千円、令和7年度からは4千円に値上げ）として毎年寄附をお願いする仕組みである。2006年にスタートしたこの取り組みは毎年、年会費として寄附を頂くのは容易なものではなかったが、魅力ある年報の発行に努め、毎年学部就職委員会と連携して同窓生と現役学生の交流会を開催するなど地道に20年継続したことで、会費納入寄附者の数は290名からスタートし、令和7年度は値上げの影響も受けず420名を確保したところである。事務局の20年の地道な活動が信頼を生み、共感が広がり、寄附につながるという流れになったものと考えている。（法文学部同窓会では名簿上は12,000名を超える卒業生がいるが、同窓会活動に関心を持つと思われる約2,000名の同窓生・支援者等に年報送付・会費納入依頼を行っている）

○同窓会活動から学んだこと

一方で同窓会活動を通じて学んだことは多く、私の人生を豊かなものにしてくれたと思う。現役時代は国・県・市町村職員を経験したが、公務員としての世界とは異なり、人も資金も限られた中で活動する難しさ、ボランティアである事務局の重要性、特に資金調達

（寄附を継続して頂く）の大変さを同窓会活動から学んだことは仕事や地域活動等においても大きな学びとなった。もうひとつの学びは同窓会の特徴でもあるが、熱い血潮の青春のひとときを同じ大学で学んだという「同窓の絆」をご縁にしたネットワークの良さ、強み、その大切さということである。長年同窓会に関わったおかげで多くの知り合いが出来た。東京、東海、関西、広島、九州に同窓会支部があるが同窓生は全国におり、実に様々な分野で活躍している。若い頃は相談する相手がわからず一人で悩んでいたが最近はずい誰かに相談して悩むことが少なくなったのも年の功である。同期先輩後輩、恩師、更に母校関係者との意見交換、懇談は楽しく人生を豊かに、そして自らを健康にしてくれていると思う。

○終わりに

国立大学法人化以降、母校と同窓会の関係は新たな段階に入った。現在、大学本部や各学部同窓会と意見交換を重ねながら、持続可能な連携のあり方を模索している。母校の発展に貢献することが、同窓会自身の未来を切り開くことにつながる。その意味で、母校と同窓会はまさに運命共同体である。

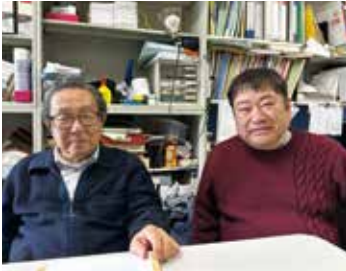
今回、長いお付き合いのあるサラトさんからこのような発信の機会を得たことを大変うれしく思う。厳しい時代だからこそ、同窓会同士が学び合い、知恵を出し合い、連携して困難を乗り越えていきたい。発信力を高めることこそが、未来に向けて持続可能な母校と同窓会であるための重要な戦略のひとつであると学ばせて頂いたところである。■



卒展×同窓のつどい

東京工芸大学同窓会

卒展がつなぐ世代の輪



●連絡先

〒164-8678 東京都中野区本町2-9-5
TEL・FAX 03-5371-2732
メールアドレス kougei_dousoukai@kougei-dousoukai.jp
https://www.kougei-dousoukai.jp

同窓会事務局

左：立川 宏司（たちかわ・ひろし） 写真工業科42期
右：上田耕一郎（うえだ・こういちろう） 写真学科75期

●東京工芸大学では、毎年、大学キャンパス全体を会場として、卒業制作展を開催している。この卒業制作展の会期に合わせて、数年前から同窓会主催で、「卒展×同窓のつどい」という交流の場を設けている。

それは一体どのような内容なのか。具体的な運営について、同窓会事務局を担当する立川宏司氏と上田耕一郎氏に伺った。

卒展が生む「再訪の動機」と交流の起点

私たちの大学では、卒業制作展を学生が学びの集大成を社会に向けて発信する場として位置づけ、時代とともに形を変えながら継続してきました。かつては学外の大規模会場で開催されていた時期もありましたが、キャンパスのリニューアル以降現在は中野キャンパスで実施しています。内容の充実度を変えず、芸術学部のみならず全7学科(写真・映像・デザイン・インタラクティブメディア・アニメーション・ゲーム・マンガ)の卒業生と大学院芸術学研究科の修士生全員の多彩な表現が一堂に会しています。

展示は単に作品を並べるだけではなく、限られた空間の中で来場者の視線を意識し、構成や演出を工夫しながら「どう伝えるか」を追求する場でもあります。この経験は制作力だけでなく、発信力そのものを鍛える機会となっています。

こうした卒業制作展は、卒業生にとっても特別な意味を持ちます。自身の原点を思い出し、後輩たちの成長に触れることができるのは、「母校に戻る理由」として強い求心力を備えています。そしてこの「戻る動機」こそが、同窓会による交流企画の基盤となっています。

「会話が主役」の場づくりと設計思想

「卒展×同窓のつどい」の目的は、華やかな演出や成果を競うことではありません。卒業生と在校生、さらには関係者が自然に出会い、言葉を交わす「接点」を生み出すことに重きが置かれています。

会場となるのは中野キャンパス2号館の学食です。卒業制作展の見学動線の中に位置づけることで、来場者が無理なく立ち寄れるよう工夫されています。展示を見終えた卒業生がひと息つき、そこへ在校生が加わる。そんな偶発的な出会いが生まれる環境が整えられています。

会話のきっかけは実にシンプルです。「何学科ですか」「何期ですか」といった一言から始まり、同じ学び舎で過ごしたという共通点が距離を一気に縮めます。そこには肩書や立場を超えた、フラットな関係性が生まれます。

また、この集いには堅苦しい進行はありません。長い挨拶やプログラム進行をあえて設けず、最小限のアナウンスのみにとどめていきます。来た人が自由に会話し、自由に場を離れることができる「休憩室のような場」として設計されているのです。この余白こそが、自然な交流を生み出す最大の要因となっています。



継続を支える運営の工夫と同窓会の役割

この取り組みが続いている理由の一つに、「無理なく回す」運営体制があります。同窓会が会場設営や受付を担い、当日は卒業期の確認などを行います。運営には同窓会役員に加えて学生アルバイトが参加し、準備や配膳は学内業者と連携して進めます。毎年の基本的な流れを定型化することで、過度な負担をかけずに継続できる仕組みが整えられています。

また、時代に応じた柔軟な見直しも行われています。2019年4月から芸術学部が中野キャンパスに一元化されたこともあり、二十歳未満の学生への配慮からアルコール提供を取りやめ、ソフトドリンク中心の運営に切り替えました。「場を盛り上げる」こと以上に、ルールを守り「場を壊さない」ことを優先する姿勢が、安心して参加できる空間を支えています。

当初は参加人数の見込みが難しく、準備に苦労することもありました。しかし回を重ねるごとに認知が広がり、「今年も参加します」といった声が事前に届くようになるなど、行事としての定着が感じられるようになっていきます。運営側が具体的な成果を数値で把握することは難しいものの、「また来るね」という一言が次の来場につながり、緩やかな関係の更新を生み出しています。

この取り組みが示しているのは、同窓会の新しい関わり方です。単なる資金的支援にとどまらず、卒業生自らが現場に足を運び、在校生と同じ空間で時間を共有する。組織として関わるからこそ継続性が生まれ、次世代へと引き継がれていきます。

「卒展×同窓のつどい」は、世代や立場を越えて人がつながる場として、同窓会の価値を体現する存在となっています。



●連絡先
一般社団法人岐阜工業高等学校同窓会
〒501-6083 岐阜県羽島郡笠松町常盤町1700
TEL 058-387-4141
E-Mail c27319@gifu-net.ed.jp
URL https://www.gifukougyou-dousoukai.net

わが学び舎



一般社団法人岐阜工業高等学校同窓会

■校訓 礼儀正しく 勤労を尊び 創意工夫に努めよ

学校概要

岐阜県立岐阜工業高等学校は、大正15年（1926年）に岐阜県第一工業学校として設立されて以来、100年の歴史と伝統を誇り、令和7年度（2025年）には創立100周年を迎えた県下の工業系高校のトップ校である。生徒たちは、運動部の朝練の締めくくりに正門前の校旗掲揚塔で校訓を斉唱することを伝統としている。

「ものづくり日本一、部活動日本一、資格取得日本一をめざす」ことを掲げ、生徒一人ひとりが高い志とグローバルな視野をもって夢に挑戦できる人材の育成を目指し、「文武両道」を真に実践する生徒が多数在籍していることが特色である。■

沿革

大正13年（1924）文部省告示第349号をもって岐阜県第一工業学校設置が認可
大正15年（1926）羽島郡笠松町の現在地に本館校舎が落成し、開校式を行う
第1回入学式（104名）

昭和21年（1946）昭和天皇の岐阜県工業試験場視察のため、本校は随員の宿舎となる。現在の記念館は昭和天皇の宿舎であったもの

昭和22年（1947）学校教育制度の改正による6・3・3制実施にともない、新制中学校と改称

昭和23年（1948）岐阜県立岐阜工業高等学校と改称

昭和29年（1954）岐阜大学工学部（昭和18年、岐阜県立高等工業学校として現在の本校校地内に設立）の旧校舎1、500坪（約4,950㎡）を本校に移管

昭和31年（1956）創立30周年記念式典を挙行。記念図書館竣工

昭和35年（1960）講堂兼体育館完成

昭和37年（1962）校舎全面改築起工式を挙行

昭和50年（1975）創立50周年記念式典を挙行

平成7年（1995）屋内体育館完成

平成10年（1998）文部省マルチメディア国際交流推進研究指定校（H8）研究発表会を開催

平成12年（2000）「岐工記念館」が登録有形文化財に認定登録される

平成16年（2004）トレーニング施設「砥錬館」完成

平成17年（2005）文科省指定（平成15、16、17年度）「研究開発学校」研究発表会を開催

平成21年（2009）「岐工記念館」が近代産業遺産となる

平成24年（2012）釜山工業高校へ交流10回を記念して、MINS「SHIZUKA」号を贈呈

平成26年（2014）岐阜県専門高校生国際化推進事業の一環として機械科2年生5名が海外企業でのインターンシップを実施

平成27年（2015）本校と連携協定を結んでいる、中日本航空専門学校から、航空機「RV-4」が贈呈

岐工記念館大規模改修完成

平成29年（2017）モノづくり教育プラザ開所式典を挙行

令和7年（2025）創立100周年記念式典を挙行

体育館改修工事及び北門、正門（東門）の改築工事完成 ■

表紙写真・解説

岐工記念館は、昭和4年（1929）に岐阜県工業試験場が岐阜県第一工業学校敷地内に移転した際に、本館として建築された。昭和21年（1946）には昭和天皇の戦後巡幸で宿泊所として使用された。昭和47年（1972）に岐阜県工業試験場が移転すると本館は岐阜工業高等学校の施設となった。現在は、同窓会活動の拠点として各種会議、セミナーなどに使用されている。

建物概要

昭和4年（1929）竣工。木造2階建の瓦葺。上部をモルタル、下部を板張りにした洋風建築であり、正面玄関上部には出窓が設置されている。建築面積は219㎡、延床面積は427㎡。

平成12年（2000）4月28日に、「岐工記念館（旧岐阜県工業試験場）」として国登録有形文化財に登録されたのち、平成20年（2008）に、近代化産業遺産に認定されている。■



岐工記念館全景

ごあいさつ

復興の歩みと共に、さらなる絆の未来へ



株式会社サラト・代表取締役
福田 裕一（ふくだ・ゆういち）

●詳しくは、弊社ホームページから
URL : <https://www.salat.co.jp/>



おかげさまで『同窓会のチカラ』第18号が無事完成し、全国約6300校の大学・短大・高校・高専・専門学校などの同窓会へお届けできる運びとなりました。取材に快くご協力くださいました関係者の皆さまに、心より御礼申し上げます。

さて、小誌の紙面を具体的な事例紹介型へと大きくリニューアルした2011年は、東日本大震災が発生した年でもありました。言い換えれば、小誌は震災からの復興、そして日本が困難を乗り越えて再生していく歩みとともに歩んできたとも言えます。その後も熊本地震、北海道胆振東部地震、能登半島地震をはじめ、豪雨や台風などによる自然災害、さらには2020年からのコロナ禍など、社会は幾度となく大きな試練に直面してきました。そのなかで私たちは、同窓会が単なる親睦の場にとどまらず、有事の際の支え合いや母校支援、さらには社会貢献へとつながる力強い存在であることを、数多くの取材を通じて実感してまいりました。

また一方で近年は、オンラインツールの活用やキャッシュレス決済の導入など、環境の変化や時代の要請に応じて同窓会運営のあり方も少しずつ進化しています。

しかし、どれほど環境が変わろうとも、同窓会が卒業生一人ひとりの精神的な支えであり、母校を想う情熱の集う場所であるという本質は変わりません。人とのつながりの価値が改めて見直される今こそ、世代を超えて受け継がれていく「絆」の力は、これまで以上に大きな意味を持っているのではないのでしょうか。本号でも、そのような多様な「絆」の姿をご紹介します。

ぜひ小誌をご覧いただき、記事内容に関するご意見やご感想をお寄せいただければ幸いです。

キャッシュレスで、簡単決済！

会費等のお支払いがスマートフォンからできます。営業時間が長いコンビニの振込用紙を導入いただくことで、各校の入件数は大幅に増加しました。今後はスマートフォンでの支払いも可能となり、より若い世代や外出の機会が少ない方からのご協力も見込めることができます。

アプリを
インストール・起動



バーコード読取



支払い



支払い完了



※支払先は「サラト」となります。
後日、同窓会口座へ振替えます。

ご利用可能な
スマートフォン
決済アプリ



※利用方法の詳細については、各アプリ事業者のHP等をご確認ください。

です。また、同窓会運営に関するお困りのことや解決したい課題などがございましたら、弊社営業員が訪問の際にお気軽にご相談ください。

創刊当初の想いと、復興の歩みとともに重ねてきた歳月を胸に、私たちサラトはこれからも時代とニーズに寄り添いながら、全国同窓会活動を支え続けてまいります。そして、温かな交流の輪が次世代へと広がっていくよう、これからも全力で取り組んでまいります。

同窓会のチカラ

2026年号 / Vol. 18

(2026年4月発行)

編集・発行 株式会社サラト

本社・〒670-0948 兵庫県姫路市北条宮の町172

TEL 0120-138-000 ● FAX 079-224-7746

東京支社・〒110-0016 東京都台東区台東4-18-7

シモジンビル5F

TEL 0120-036-381 ● FAX 03-3832-6389

E-mail eigyos@salat.co.jp

URL : <https://www.salat.co.jp>

SALAT
Salat Corporation



© TOMY

右から：
神奈川県・鶴見大学附属高等学校
群馬県・館林女子高等学校

●制服オリジナルリカちゃんに
新しい仲間増えました
(お問合せは弊社まで。)

サラトは昨年(令和7年)、全国160校の同窓会名簿を納品させていただきました。発行にご協力をいただきました同窓会・学校・会員の皆様に心より御礼を申し上げます。

